

書 評

竹田晃編

『柳宗元古文注釋——說・傳・騷・弔——』

谷 口 匡

京都教育大學

いわゆる唐代古文の形成において、韓愈と柳宗元の二人が多大な貢獻をなしたことは言を俟たない。しかし韓愈がその後半生は概ね中央で指導的地位にあったのと比べると、柳宗元は左遷されたまま一生を終えた孤高の存在であつて、後世における影響力も、「文革」の一時期などは例外として、壓倒的に韓愈の方が大きかった。

後世の人々、とりわけ日本人が韓・柳の文章をどのように讀んできたかを考えると、それは別集よりは總集、すなわち主要な作品を抜粹した選集によつたのではなからうか。

そうした書物のうち、今日に至るまで普及しているものは、南宋・謝枋得の『文章軌範』、元・黃堅の『古文眞寶後集』、清・沈德潛の『唐宋八家文讀本（唐宋八大家文讀本）』などがあり、「漢文大系」「漢籍國字解全書」「國譯漢文大成」「新釋漢文大系」などに收められて現代でも手軽に讀むことができる。このうち『文章軌範』には韓愈三十二篇、柳宗元四篇、『古文眞寶後集』には韓愈十三篇、柳宗元三篇、『唐宋八家文讀本』には韓愈九十四篇、柳宗元四十九篇が選ばれ、こうした數の上でも韓愈優勢であることが見てとれる。

韓愈に關しては清水茂譯『韓愈 I・II』（筑摩書房・世界古典文學全集、一九八六・八七年）が出て、外集や「順宗實錄」を除くすべての散文作品に對する現代語譯が提供された。柳宗元の場合、清水茂『唐宋八家文 上』（朝日新聞社・新訂中國古典選、一九六六年）、笈文生『韓愈 柳宗元』（筑摩書房・中國詩文選、一九七三年）、横山伊勢雄『唐宋八家文 上』（學習研究社・中國の古典、一九八二年）、笈文生『唐宋八家文』（角川書店・鑑賞中國の古典、一九八九年）な

どに、上記の總集とは別の觀點で散文が選ばれているが、書名からわかるように柳宗元單獨の書物でないこともあって、その作品数は僅かである。

このように今なお日本では柳宗元の散文作品の一事について解説を施した書物がけっして十分とはいえない中、そうした長年の渴望を癒すかのように刊行されたのが本書である。以下に構成と執筆者（敬稱略）を示す。

はじめに（竹田晃）

柳文「説」「傳」「騷」「弔文」概説（黒田眞美子）

譯注篇

凡例／底本について（遠藤星希）

- 一 説／天説（遠藤星希）、鵲説（山崎藍）、祀朝日説（高芝麻子）、捕蛇者説（梶村永）、禘説（福田素子）、乗桴説（周重雷）、説車贈楊梅之（遠藤星希）、謫龍説（福田素子）、復吳子松説（高芝麻子）、罷説（山崎藍）、觀八駿圖説（周重雷）
- 二 傳／宋清傳（大野公賀）、種樹郭橐駝傳（高芝麻子）、

書評

童區寄傳（田中智行）、梓人傳（周重雷）、李赤傳（山崎藍）、蝮螾傳（大村和人）

- 三 騷／乞巧文（山崎藍）、罵尸蟲文（相野谷智之、斬曲几文（溝部良恵、宥蝮蛇文・憎王孫文（高芝麻子）、逐畢方文（相野谷智之）、辨伏神文（遠藤星希）、愬螭文（上原究二）、哀溺文（溝部良恵）、招海賈文（上原究一・高芝麻子）

四 弔／弔裴弘文（田中智行）、弔屈原文・弔樂毅文

（福田素子）

參考文獻

附録

- 一 關係資料注釋／『舊唐書』・『新唐書』柳宗元傳（詹滿江）、劉禹錫「祭柳員外文」（市川桃子）
 - 二 柳宗元の版本について（遠藤星希）
 - 三 訓讀一般および柳文の訓讀について（古田島洋介）
 - 四 柳宗元年譜（福田素子）
- あとがき（竹田晃）／索引／執筆者紹介

本書に選ばれた柳宗元の散文は三十篇であり、副題にあるようにそれらは「説」「傳」「騷」「弔」の四つのジャンル（文體）である。まずこのことに觸れておこう。本書中にはなぜこの四ジャンルであるかに關して言及がないが、本書が底本とする百家注本（後述）をはじめとして通行する柳宗元の別集では卷十六の最初から卷十九の途中までにあたる。またその内譯は「説」十一篇、「傳」六篇、「騷」十篇、「弔」三篇である。一方、從來、上記の總集に採られてきた柳宗元作品は、『文章軌範』では「辯」「書」「議」「序」各一篇、『古文眞寶後集』では「序」「傳」「辯」各一篇、『唐宋八家文讀本』では「記」二十篇、「序」七篇、「書」「傳」各四篇、「議」「説」「碣」「墓表」各二篇、「表」「辯」「碑」「論」「銘」「行狀」各一篇であり、『文章軌範』と『古文眞寶後集』の作品はすべて『唐宋八家文讀本』にも選ばれている。『唐宋八家文讀本』では「記」のジャンルが群を抜いて多いのが目を引き、とりわけいわゆる「永州八記」に代表される山水遊記はその後の選集でも收められる傾向が強い。

本書はこの「記」のジャンルを選ばずに「説」「傳」「騷」「弔」を對象とする。この中で從來比較的よく讀まれてきたのは「傳」であり、『唐宋八家文讀本』でも「梓人傳」「種樹郭橐駝傳」「宋清傳」「童區寄傳」の四篇を收録する。しかしその他のジャンルでは、「説」は「捕蛇者説」「天説」を除けば殆ど取り上げられず、『楚辭』の流れを汲む「騷」「弔」に關しては、屈原に影響を受ける歴代の諸作品を集めた朱熹の『楚辭後語』に六篇が選ばれ、『漢文大系』『漢籍國字解全書』等の『楚辭』に收録されているが、それ以後は清水茂『唐宋八家文 上』に「憎王孫文」が收められる程度で、詳しい譯注が施されることはなかった。「騷」「弔」の二ジャンルは嚴密には「古文」ではないが、『柳宗元古文研究』の一環として會讀の對象として選んだ（「まえがき」という。「古文」の定義をどう考えるかは措くとして、『楚辭』を意識した美文調の難解な韻文である「騷」「弔」に一應の通解が與えられたことは、今後の柳宗元研究の進展に大きな意義を有しよう。

「説」や「傳」についてもこれまで見過ごされたもの

含め、ほぼすべての作品に譯注が施された(但し外集に收める「劉叟傳」「河間傳」は除く)。このことは唐代古文への視點を個々の作品解釋からジャンル論へと廣げる契機となるだろう。唐代における古文の誕生は、單に形式の上で駢文から轉換したのではなく、個々のジャンルにおいて内容上の變化を生じていることにも注意を拂うべきである。その意味で大きな役割を果たしたのはやはり韓・柳であつた。中でも「説」「傳」にはそれが顯著に窺える。

以上の點に鑑みれば、本書で「説」「傳」「騷」「弔」の四ジャンルが譯注の對象に選ばれたのは、柳宗元散文研究の上で少なからず意味のあることであらう。

本書にはすでに下定雅弘氏による簡にして要を得た書評がある(『東方』四〇三號、二〇一四年九月)。以下、それとの重複をできるだけ避けながら、「柳文」「説」「傳」「騷」「弔文」概説(以下「柳文概説」と略稱)と譯注篇について主に取り上げたい。

「柳文概説」は「説」「傳」「騷」「弔」の四ジャンルに

ついて、『文心雕龍』『文章辨體』『文體明辨』など古來のジャンル論に關わる古典的批評や、褚斌傑『中國古代文體概論(增訂本)』(北京大學出版社、一九九〇年)ほか近年の研究も參照しながら各ジャンルの定義を述べ、さらに柳宗元の作品にも言及して柳文における各ジャンルの特質をまとめたものである。本書が特に四つのジャンルのみ、しかもそのほぼすべての作品を選んだ書物である以上、最初にこうした總説が書かれるのは當然であり、唐代古文の研究を個別の作品論からジャンル論へ一步進める上できわめて大切な議論がなされている。

「説」については「論」と同様には是非を明らかにして誤りを正す文だが、情の要素が濃厚であり、より平明で輕妙な表現が用いられ、三國・六朝以來、「論」の付屬的位置におしやられ、殆ど絶えようとしていたこのジャンルを、韓愈と柳宗元の二人が復活・獨立させたとする。またそれは先秦諸子百家の遊說の士が用いた「説」の再發見によって可能になったという。

このまとめは「説」の特性と變遷をよくおさえているが、

付言すれば、「論」と比較しての議論はすでに褚斌傑氏の前掲書によってもなされている。すなわち「説」は「雜文や雜感の性質をおび」「感慨を敘するような傾向がある」(同書の編譯である福井佳夫譯『中國の文章——ジャンルによる文學史』汲古書院、二〇〇四年、一三〇頁および一三二頁による)とあり、同じ議論文でもその雜文的性格から「論」の後塵を拜していたのが、むしろそれを前面に押し出し、盛んに感慨を發するようになってジャンルとして獨り立ちしたといえる。

「柳文概説」では柳宗元の「説」を「柳宗元の價值觀の表白」「俗世および人間への批判」「その他」の三類に分けるが、この分類には検討の餘地もあろう。たとえば「その他」に分類されている「説車贈楊誨之」が訓戒の内容をもつのは最初から他者に贈る目的で書かれたからであつて、のちの蘇軾の「稼説」などにも通じ、いわゆる「贈序」にも近い。他者に贈る訓戒は「説」の特質の一つで、「その他」としておくわけにいかないかもしれない。

また柳宗元の「説」の形式について問答體・會話體に拘

泥しないとすると、「天説」「禘説」「祀朝日説」のような考證・解説の文にまで問答形式を用いるのは、先秦諸子における辯論の「説」を意識した結果と考える。「雜説」「師説」など現存する韓愈の「説」がすべて問答體でないのに比べて、先秦の「説」や曹植「髑髏説」にも見られる傳統的な問答形式を色濃く残していると見ることもできよう。

次に「傳」は、明・徐師曾の『文體明辨』における「史傳」「家傳」「託傳」「假傳」の枠組みによつて分類が試みられる。その結果、「梓人傳」「種樹郭橐駝傳」「宋清傳」は「託傳」、「童區寄傳」「李赤傳」は「史傳」に近い「傳」、「蝥螋傳」は「傳」の原則を搖るがす作品とされる。とりわけ「李赤傳」「蝥螋傳」の分析は、從來の「傳」に對して柳宗元がいかに新しい特色を出しているかが具體的に論じられ、教えられるところも多い。

ただ「托傳」の定義について『文體明辨』における「傳」の序説「細人有りて法るべきは則ち皆之が爲に傳を作りて以て其の事を傳へ、その意を寓す」を根據として、「一般庶民の範とし得る言行を著して、そこに作者の意を

假託する」(二三頁)とするのは正確でないように思う。いったい、『文體明辨』は明初・吳訥の『文章辨體』に基づき修訂を加えて成ったものとされるが、「傳」の序説についてもそれは言えよう。『文章辨體』の「傳」の序説はまず「史傳」について述べたあと、「その後、世の士大夫、或いは忠孝才徳の事に値^あひ、その湮没^{おぼ}して白^あらかならざるを慮^おり、或いは事跡微なりと雖も卓然として法戒と爲すべき者あり、因りて爲に立傳し、以て世に垂る。此れ小傳、家傳、外傳の例なり」とある。つまり史官ではない文人が世に傳えるべきこととして「史傳」とは別に書いた「傳」が存し、それには小傳・家傳・外傳がある。『文體明辨』はこれを踏まえて「是れ(史傳)に嗣^ついで山川里巷に、或いは隱德^あ有りて彰^あはれず、或いは細人有りて法るべきは則ち皆之が爲に傳を作りて以て其の事を傳へ、その意を寓して、文墨に馳騁^ちする者間^まま滑稽の術を雜^ちふ」(傍點引用者、以下同じ)と言うから、傍點部分も含めて「史傳」以外の「傳」全體を定義しており、それには「家傳」「托傳」「假傳」があると述べているように讀める。

書 評

また、「傳」の解説は「螻蛄傳」譯注の「補説」(二三二—二三三頁)でもなされており、そこでは實在の人物の傳記と架空の人物の傳記に大別してまた別の觀點から分類を試みている。執筆者によつて枠組みが異なるのはやむを得ないとしても、何らかの言及があつてしかるべきであろう。もう一つ氣になったのは「文學」という語である。「李赤傳」に關して、「人間の本質を凝視する『文學』として成立し得た」、「『傳』に、豊かな文學性を賦與した」(二五頁)とあるが、これは近代的な意味での「文學」であろう。唐宋八家の場合、「表現について反省をともなつた言語」(清水茂「八家文は文學か」『新訂中國古典選』附録No.7)といった文學の定義もあり、他の作品も含めて深く考えてみた問題であつた。

最後に「騷」「弔」が『楚辭』の形式との共通點に注意しつつ、一々の作品に即してかなり詳細に取り上げられる。その結果、底本卷十八で「騷」の作品として收められた十篇は、竹治貞夫『楚辭研究』における四分類、すなわち天問型、九歌型、橘頌型、離騷型という異なる形式のすべて

に亘っていることを明らかにしている。また卷十九に収める「弔」三篇は、その起源とされる賈誼「弔屈原文」のような「賦」のスタイルではなく、「騷」體で表現されることを述べている。これにより政權の中樞から一轉してはるか南方へ左遷された柳宗元が、かつて自身と同様の運命を辿った屈原への深い共感をもとに、『楚辭』の形式への接近を試みていることがよくわかる。

永州左遷後のこととして『舊唐書』柳宗元傳に「騷人の鬱悼を積み、……騷文十數篇を爲^{つく}」^つるといい、『新唐書』柳宗元傳でも同様に「其の埋厄感鬱、一に諸^{これ}を文に寓し、離騷に倣ふこと數十篇」と記すのが、「注解」（四〇六頁）に指摘するように「騷」體の文を指すとすれば、これもまた「永州八記」などとは別に當時の柳宗元自身の思いを述べるのに相應しい文體としてあえて選ばれたものである。その意味では陶淵明が彭澤縣令を辭して郷里に戻った心境を「歸去來の辭」という『楚辭』のスタイルで書いたのに似るといえよう。

「柳文概説」では「騷」の説明に關しても『文體明辨』

を援用し、同書の「文」の序説に「楚辭に倣ふ」とあるのが「騷」であるとしている。つまり『文體明辨』では「文」のジャンルに「騷」が含まれるというわけである。ただ「騷」という時に、そのジャンルを成立させた『文選』では「離騷」「九歌」など『楚辭』に含まれた作品を指すが、『文體明辨』になるとそれらは「騷」ではなく、「楚辭」と稱される。『文體明辨』では「文」のように表題の末尾に「文」がつく作品を機械的に「文」のジャンルとしただけで、そうでない『楚辭』ふうの作品は「楚辭」に含めている。

まとめると、『文選』によって確立した「騷」のジャンルは『楚辭』所収の作品を指したが、柳宗元の集では『楚辭』に倣った一連の柳文を「騷」と稱した。但しそれらはすべて「文」という表題をもつので、明代の『文體明辨』では「文」のジャンルに入れて、その他の『楚辭』ふうの作品は『楚辭』とともに「楚辭」のジャンルに分類した。以上のように時代順に整理すると、「騷」の呼稱を避けた『文體明辨』の分類を援用するとかえって説明が複雑

になるように思われる。

一方、「弔」の三篇に關しては『文體明辨』では「弔文」に分類し、三篇とも收録する。「弔文」というジャンル名は梁・任昉の『文章緣起』にすでに見え、『文選』にもジャンルを立てる。ただその筆頭に載せる賈誼の「弔屈原文」は、『文體明辨』では「弔屈原」の表題で「楚辭」の部に録される。褚斌傑氏は「弔文」は「じつさいは祭文の一種である」（福井佳夫譯前掲書二三頁）とし、古人を偲んだ文章だが、「柳文概説」は「三人の古人はともに懷才不遇の士で、柳宗元は自らの思いを重ねて、その死を追悼したのである」といい、追悼文であるとともにそこに書き手の心情を投影させる「弔文」の特色を示している。

總じて「柳文概説」では「騷」と「弔文」の形式については詳しく論じられているが、「騷」ジャンルの内容面での特色が總體的にどうであるか、「弔文」とどう異なるのかは、はっきりとは書かれていない。「騷」に關しては作品の内容が多岐にわたるため、個々の譯注に譲ったのかもしれないが、全作品を見通した解説がほしいところであった。

以上のように「柳文概説」はいくつかの問題點を残すといえ、一々の作品の譯注を踏まえて執筆された信頼できる論述となっている。今後、この四つのジャンルについて考える上での基礎となる研究といえよう。

次に本書の中核ともいえる譯注篇に移ろう。譯注篇はジャンルごとに四つに大別され、各作品の譯注は、「要旨」「原文」「書き下し」「現代語譯」「注解」「補説」から構成されている。まず「要旨」が譯注の最初に置かれる。作品はごく短いものを除けば、段落に分けられ、「原文」「書き下し」「現代語譯」「注解」は段落ごとに示されている。そして最後に必要に応じて「補説」が付される。

このように見て、氣づくことは作品の解題がないことである。「要旨」はほぼ内容の要約のみであり、また「補説」の内容は後述するように執筆者に委ねられており、作品によってはないものもある。従って、作品全體の位置づけなり價值を論じた解題に相當する記述は、「補説」で扱われなければ、それを缺く作品が出てくるように思われ、

構成上氣になった點であつた。

「原文」には、底本として南宋蜀刻本『新刊増廣百家詳補註唐柳先生文』、いわゆる百家注本が採用されている。現存する柳宗元集の中でも比較的早いものでありながら諸家の注を豊富に含み、かつ現在普及するテキストである吳文治等校點『柳宗元集』（中華書局、一九七九年）もやはりこの百家注本を底本としている。本書が百家注本を底本とするのもこれらを考慮した上でのことで、一つの見識であろう。

百家注本について氣になるのは、「禮說」の「子曰」（予曰く）を「子曰」に作り（二〇二頁）、「宋清傳」の「咸、譽清」（咸清を譽む）を「或、譽清」に作り（二六七頁）、「辨伏神文」の「余、病瘡且悸」（余瘡を病みて且つ悸つ）を「餘、病瘡且悸」に作り（三〇六頁）、「哀溺文」の「故與彼咸諡爲氓」（故に彼と咸諡して氓と爲さん）を「故與彼咸諡爲氓」に作る（三三三頁）など、百家注本のみが他の諸本と異なる字に作る場合が散見することである。本文に關しては必

ずしも底本が優れるわけではないといえよう。

「默測、憎憐」（乞巧文）二四〇頁の「測」、「卒施快、於劉狻兮」（弔袁弘文）三六五頁の「快」なども、それぞれ底本が「則」、「快」に作るのを改める。これらは上記『柳宗元集』の校勘に従ったものであるが、「禮說」の「夫聖人之爲」に至っては、底本でも他の諸本でも「夫聖人之爲心也」に作っているのに「一に『心也』の字無し」という注があるのを理由にこの二字が削られている（二〇〇頁）。

「心也」があつても「夫れ聖人の心を爲すや」と訓讀し、「そもそも祭祀における聖人の意圖には」などと解釋して文脈上それほど違和感はない。底本を百家注本とした以上は簡単に本文を改めずに、できるだけその原文に従うのが本来ではなからうか。

「原文」に續いては、「書き下し」の項目で訓讀が示される。「まえがき」によれば本書の基礎となった讀書會の目標の一つが「漢文訓讀法」の正しい習得におかれていたこと、さらには附録「訓讀一般および柳文の訓讀につい

て」が加えられ、訓讀に關わる問題點が論じられていることなどから考えて、譯注の中でも特に意を用いた部分だったと想像される。

從來、柳文に關してはほぼすべての作品に鵜飼石齋の訓點が施された和刻本があり、これは「機械的でなく、よく文意によつて字訓を選んでゐる」(清水茂『唐宋八家文上』韓愈八頁)とも評され、汲古書院刊の影印本(『和刻本漢詩集成 唐詩 第五・六輯』)が刊行されて簡單に見られることから、評者などはこの石齋點を頼りに讀んできた。ただ石齋の訓點は今日からすれば文意の通じにくくなった古い訓も見え、かつ解釋の違いや誤刻と疑われる部分もある。またそれ以後に譯注や研究により新たな解釋が付加された作品もある。本書ではそうした研究の蓄積の上に立つて、最新の解釋に沿った訓讀を提供するように努めている。とりわけ「説」の作品の大半や「弔」で『楚辭後語』にも採られなかった數篇は、石齋點が殆ど唯一の訓讀の手がかりなるが、それを見てもどう讀んでいるかわからない箇所がある。そこに新たな讀みを提示しているのが、本書の大き

な價值といえる。

たとえば「天説」の末尾近く、「子而信子之仁義以遊其内」の「而」を、石齋點は「而も」(しかも・しかれども?)と訓ずるがよく讀めない。しかし本書のように「子而し子の仁義を信じて以て其の内に遊べば」と讀むとすつきりする(六七頁)。また「鵲説」で、鵲が一晩自分の足を溫めるために捕えた小鳥を、朝になって放してやる時に、自身はきつと小鳥と反對向きに飛ぶ様子を、「遠而違之」と記す。それを石齋點に従つてそのまま書き下すと「遠て違ふ」だが、本書では「遠ざけて之を違る」と明快である(七五頁)。この類は枚舉にいとまがない。

さらに「斬曲几文」では、昔はまっすぐだった「几」(つくえ・脇息)が後世では奇怪な形狀に曲がつてしまつたさまを、「欹形詭狀、曲程詐力」と記す。石齋點では「欹形」「詭狀」「曲程」「詐力」をすべて二字の熟語のように讀む。本書では文の構造をそのように捉えずに、「欹は詭狀を形はし、曲は詐力を程す」と訓讀して、「曲がつた木は、ねじれた奇怪な形をしており、誤つた力が加え

られたことがわかる」と解する（二六五頁）。難解な箇所だが一つの方向性を示す読みであろう。こうした、機械的でない、語の意味が反映された訓讀によつて、解釋に至つた道筋を示しているのが特徴である。

單語レベルで見ると概ね傳統的な訓を當てているが、より解釋に近づけた訓讀を試みていると思われる箇所もある。「毒」（毒とす）を「若之を毒むか」（捕蛇者説）九一頁、「爪」（爪す）を「其の膚に爪たてて」（種樹郭橐駝傳）一七八頁と訓ずるのなどはその一例である。

一方で「斯れ固より世の得難き所なり」（鶴説）七五頁は「斯れ」、「則ち吾が斯の役の不幸は」（捕蛇者説）九二頁は「斯の」、「而るも郷隣の生」（同九三頁）は「而れども」または「而るに」、「故に之の説を爲り」（同九六頁）は「之が」、「其の方を輔くれば、輒ち讎れ易し」（宋清傳）一六八頁は「讎り易し」、「能く木の天に順ひ、以て其の性を致さしむるのみ」（種樹郭橐駝傳）一七七頁は「致すのみ」の方が、評者にはしっくりする。

また、「現代語譯」と對應していないと思われる訓讀も

ある。「これこそまことにこの世では得がたいものである」（斯固世之所難得也）と譯しながら、傍點部の訓讀は「固に」ではなく「固より」（鶴説）七五頁）となつてゐる。「いやはや素晴らしいことだ」（不亦善夫）の譯に對して、「亦た善からざるかな」（種樹郭橐駝傳）一八一頁）と訓讀されているが、ここは石齋點に従つて「亦た善からずや」と讀まなければ反語とならず、したがつて文意が逆になつてしまふのではなからうか。

訓讀は一種の翻譯であるから、ある程度の自由な讀みは許容される。反面、あくまでも文語で讀み下す以上、その語彙や文法に制約されるのは當然であるし、漢文訓讀法の習得という本書の趣旨からしても、傳統的、慣用的な讀みがある場合はそれにできるだけ従つてほしいと考える。

「現代語譯」に關しては、過度な意譯や表現に凝ることを避け、できるだけ原文に即し、平明な日本語で書かれてゐる。解釋にも關わる譯し方の問題については下定雅弘氏がホームページ「下定雅弘の中國文學の回廊」で公開して

いるが、評者も二、三考えた點を述べておきたい。

「乗桴説」は『論語』公治長篇の「子曰、道不行、乗桴浮于海、從我者其由歟。……」の章をめぐる解説である。

柳宗元はこの章に見える「海」「桴」「材」などの語が喩えるものを解き明かしたのちに、孔子は顏淵を理想に近いと考えていたにも拘らず、子路の名をここであえて出している理由を述べている。その部分「而曰其由也歟者、當是歎也回死矣夫」を、「現代語譯」では「『ついでいくのは由だろくなあ』と言ったのは、孔子は顏回が早世したことを嘆いたのに違いなからう」としている（一二二頁）。

ここには二つの問題を含む。一つは「而曰其由也歟者」は公治長篇の「從我者其由歟」を指すように見えて、

「也」の字の有無も一方で氣になる。『論語』では、子罕篇に「衣敝緼袍、與衣狐貉者立而不恥者、其由也歟」（敝れたる緼袍を衣、狐貉を衣たる者と立ちて恥ぢざる者は、其れ由なるか）、顏淵篇に「片言可以折獄者、其由也歟」（片言以て獄を折むべき者は、其れ由なるか）と別な文脈で子路を評した箇所もあり、それらも併せ踏まえている可能性がある。

もう一つは「當是歎也回死矣夫」の読みだが、「當に是れ回の死せるを歎くべきかな」と訓讀して、「現代語譯」は「顏回が早世したことを嘆いたのに違いなからう」と解釋している。この場合、「也」をどう讀んだか不明であり、また前後の文脈の繋がりがすつきりしないように思う。これを假に石齋點に従って「是の嘆きに當りて回死せればか」と訓讀し、「この感嘆を發した時に顏回がすでに死んでいたからか」と解しても、顏回亡きゆえに顏回ほど完全ではないが子路の名を挙げたという説明で文意が通ると考える。なおこの場合「也」は語氣を停頓させて下文を引き出す助字で、「斯の歎きに當たりてや、回死せればか」と訓讀してもよい。

次に「種樹郭橐駝傳」の末尾に、「問者嘻曰、不亦善夫。吾問養樹、得養人術。傳其事以爲官戒」とある。「問者」は「注解」（二七九頁）で觸れるように「柳宗元本人の投影」であろう。植木職人の言葉を受けて、作者柳宗元が感慨を述べる部分である。これを本書の「現代語譯」では「尋ねた者は喜んで言った。『いやはや素晴らしいことだ。』

私は樹木の育て方をたずねて、人を育成する方法を知った。『そこでこのことを傳えて役人の戒めとした』とする（二八一頁）。ここで問題としたいのは「問者」（尋ねた者）の語を「得養人術」までとし、「傳其事以爲官戒」を地の文とすることである。従来、このように解するものもあるが、石齋點をはじめ、現代の吳文治等校點『柳宗元集』にいたるまで、「傳其事以爲官戒」も「問者」の言葉とする方が優勢である。これは石齋點で「其の事を傳て以官の戒と爲ん」と訓讀するように柳宗元の決意を示す語であつて、當時の状況から判斷して、實際に役人に傳えて戒めとしたとは考えにくいと思われるが、どうであろうか。

また「斬曲几文」の「度焉以几」を「現代語譯」では「これを量る時には、つくえを用いた。すなわちものを量る時にはつくえの上で量る」（二六四頁）とし、「注解」は『周禮』冬官・考工記の「室中度するに几を以てし、……」を引用する。これは底本の孫汝聽の注にも見えるものだが、孫汝聽がそれに續いて「几、三尺也」と注するのをなぜ引かなかったのであろうか。『周禮』鄭玄注に「各

おの物の宜しきに因りて之が數を爲す」とあるのも考え合わせると、「几」はその上に物を置くのではなく、量る時の長さの基準として用いたのではなからうか。

以上、些末な例ばかりで恐縮だが、「現代語譯」はまだ検討の餘地を残す部分もある。とはいえ、本書の價值がそれによつて減じるわけではない。「古文」で書かれた「説」や「傳」もすべてが達意で読みやすい文章とは限らず、「騷」「弔」などに至っては、永州左遷後の屈折した心情が駢文のにおいの強い韻文で表現されていて、難解である。そうした作品も含め、四ジャンルの文章ほぼすべてに一應の通釋を與え、研究の足場を築いた意味はけつして小さくはない。

そして「注解」は、『柳宗元古文注釋』の書名に相應しく、最も読みごたえがある部分である。重要語句の解説と校異が主な内容だが、先行する用例をできるだけ挙げようと努力するのがまずその特徴である。舊注ですでに指摘してあるものもとより、そうではないものにも的確な用例

を示す。たとえば「天説」の「敗逆」の語について「血液や氣が流れに従わず、逆行すること」と注するだけでなく、『史記』扁鵲倉公列傳より「敗逆する者は治すべからず」を引く（五九頁）のはこの部分の例として相應しいし、「復

吳子松説」の「呼召竅穴」では「『竅穴』はあな」とした上で、『莊子』齊物論篇の「夫れ大塊の噫氣は其の名を風と爲す。是れ唯だ作ること無きのみ、作れば則ち萬竅怒喝す」を引用して、柳宗元の腦裏にあつた意識に迫ろうとする（一四五頁）。したがって用例の見つからない語に對しても、四庫全書の檢索をもとに「柳宗元が初出」「柳宗元以前には用例が見られない」といった注記がなされ、柳宗元が初めて用いる語であることを明示している。

また、柳宗元作品の別な箇所にも用例がある場合もその都度指摘され、萬全を期している。「螭蟻文」は人間に害を與える螭を訴える文だが、その螭が「よだれをたらして深い淵を泳ぎまわ」ることを述べた「涎泳重淵」の「注解」（三三二頁）では、「螭」と同類の「蛟」も視野に入れて、柳詩「嶺南江行」の用例「潭心日暖かにして蛟涎を

長ず」に行き当たり、同部分に見える孫汝聽の注からよだれを吐いて人間を動けなくして長江に沈める蛟の特性を引き出す。ここから「螭」も同様だったとし、解釋を確定させている。

文法的な説明もやはり用例によつてなされる。「復吳子松説」では、正常な人事がなかなか行われないことを「逾千百年、乃一二人幸不出於此者」（千百年を逾えて、乃ち一二人幸ひにして此れより出でざる者あらん）と述べるが、その部分の「注解」（一四七―一四八頁）では、「出於此」が「前述の事物（此）から生じ出たことを言う」ことを、『文獻通考』に引く南宋の文獻から確認した上で、「此」が直前の文「猶反戾若此」の「此」と同じであるとして、「人の道にもとる人事を経ずに採用された者」と解する。手續きの面では慎重、周到であるが、いささか冗長でくだい印象も受ける。ただ、そうした解釋に至る過程をすべて「注解」に明示する點が本書の特色といえるかもしれない。一方、『螭蟻傳』の「其背甚澁、物積因不散」（其の背甚だ澁にして、物積みて散ぜざるに因りて）に關して、「澁」の

「注解」(二二八—二一九頁)でせっかく用例をもとに、表面がでこぼこ、ざらざらしているという意味を導きながら、「ゆがむ」と解釋するのはなぜだろうか。その結果、「現代語譯」も「背中はゆがみ、物が積みあがっても捨てないので」としているが、ここは石齋點の方向で「其の背甚だ溢れり。物積みて因りて散ぜず」と訓讀し、「背中はざらざらしている。物が積みあがってもそのおかげで散らばり落ちない」と解せるのではなからうか。

ともあれこのように徹底して用例にこだわりの、そこから解釋を導き出す姿勢が本書には貫かれているが、コンピュータを驅使しても眞にその語の意味を浮き上がらせる典據を引き出すのは案外難しい。その意味で引くべき用例として氣づいた點も少し補っておきたい。

「宋清傳」に「歳終、度不能報、輒焚券、終不復言」(歳終はりて、報ゆる能はざるを度れば、輒ち券を焚き、終に復た言はず)とあり、薬賣りの宋清が貧しい者にも掛けで薬を賣ってやり、年末になって拂えないとわかると、彼らの證文を焼いて借金がなかったことにする場面が出てくる。

(一六七頁)。この部分は孟嘗君の食客馮驩が貧乏な者の證文を焼いて、主君である孟嘗君の名聲を高めた故事(『史記』孟嘗君列傳など)が踏まえられているよう。

「辨伏神文」に伏神(茯苓)の效用を述べて心身を調和し、安寧にして「君子食之兮、其樂揚揚」(君子之を食へば、其の樂しきこと揚揚たり)とする(三〇八頁)。これは『左傳』昭公二十年に、心が和するさまを羹を作ることに喩えて「君子之を食へば、以て其の心を平らかにす」と晏子が言ったのが響いているかもしれない。

「招海賈文」は危険を冒して利を求め、海に出かける商人に歸ってくるよう呼びかける文章である。その終り近くに「君不返兮、諡爲愚」(君は返らず、諡して愚と爲さん)とある(三五四頁)。「現代語譯」には「君は歸つて來ない、『愚』と贈り名しようではないか」と譯すが、これだけではよくわからない。だが司馬相如「喻巴蜀檄」(『漢書』司馬相如傳ほか)の「身死して名無く、諡して至愚と爲す」を念頭に置けば、商人の悲惨な死を述べたものと理解できる。

以上の部分はいずれも「注解」を缺いているが、これらの用例は引いておいてもよいように思う。こうした用例の指摘は底本の百家注本にはなく、世綵堂本の注に見られるものであることを附記する。

なお、作品によって「注解」の繁簡が異なっていることは指摘しておかなければならない。多くの語に非常に詳しく注がついており、いささか過剰で煩わしいと思えるほどのものもあれば、全體に注の数が少なく、あつさりしているものもある。執筆者の違いによると言えばそれまでだが、全體で統一を圖つてもよかつたであろう。

「補説」の内容は執筆者に委ねられており、一定していない。上述したとおり「蝸蟻傳」の「補説」では「傳」ジャンルの解説がなされているし、一方、「種樹郭橐駝傳」のごとく唐代における果樹園・庭園・植木職人といった作品をとりまく状況を論じたものや、「愬螭文」のようにもっぱら形式の面から「騷」體としての特異性を述べたものもあり、それぞれ執筆者の觀點から作品理解に必要な論述

がなされている。その中では特に「說車贈楊誨之」や「辨伏神傳」「弔袁弘文」などで關連する柳宗元作品に言及して、背景や主題を掘り下げたり、「憎王孫文」で内外の近年の論著を援用しながら、同類の作品の系譜を論じたりしているのが目を引いた。これは「補説」にとどまらないことだが、本書の特徴の一つとして、最新の研究をふんだんに取り入れ、解釋に利用していることが挙げられる。

他方で舊來の注や評論にも着目すべきものはあり、一例を挙げれば「乞巧文」に關しては、宋・洪邁『容齋續筆』卷一五に、韓愈の「送窮文」と共に揚雄の「逐貧賦」を模擬したものと論じる。こうした作品相互の影響關係や位置づけについては、本書では必ずしも言及されていない。また近人章士釗の『柳文指要』は現在のところ、當時の柳宗元をとりまく状況と一々の作品との關係を論じた最も詳細な研究である。本書中でも處處で用いられているが、その検討はまだ十分ではない。これらは今後の課題として残されている。

以上、評者の力不足によって、とりあえず気づいた點を

羅列しただけになったが、譯注篇は全體として見れば、今後の柳宗元研究に十分資する水準をもち、これを文學研究として一步進めるための基礎研究として、豊富な材料を提供することはまちがいない。

附録についてはもはや多くを觸れえないが、「關係資料注釋」に柳宗元の傳記資料として、兩『唐書』の「柳宗元傳」、劉禹錫「祭柳員外文」の譯注が付されている。これまでは韓愈の「柳子厚墓誌銘」が取り上げられることが多かった（小川環樹編『唐代の詩人——その傳記』、下定雅弘編譯「柳宗元詩選」など）が、それを補うものとして活用されよう。

「柳宗元の版本について」は明代までの柳宗元の版本の流れにつき、これまでの研究をわかりやすくまとめた勞作である。

また訓讀の際に問題となった論點のいくつかは「訓讀一般および柳文の訓讀について」に具體的に記される。それは「A 訓讀一般に關する問題」と「B 柳文に關する問

題」に分けて示されているが、特に後者は讀書會における議論が窺われて興味深い。

「柳宗元年譜」は見開き二頁の簡略なものだが、本書に収める作品の成立年代についても併せて記されている。成立年代は各擔當者の調査によるとだけあるが、ふつう永州時代の作とされる「捕蛇者説」が「成立年代不明」となっているなど、少なくとも通説と異なるものについては説明がほしいところである。

本書は最初から柳宗元散文の研究を企圖したものではなく、「はじめに」によれば、編者の周圍で「中國の古典の文章をきちんと讀みたい」という聲がおこり、中國古典文學專攻者にとって「共通の關心事を引き出し得る」人物として選ばれたのが柳宗元であるという。そして九年間にわたる計八十回の讀書會を経て、最終的には編者を含め十七名の研究者により共同で書かれた。執筆者の専門は唐代文學に限られず、時代・ジャンルともさまざまであり、近代や日本文學にも及んでいる。すなわち嚴密な意味では非專

門家も含みながら、「参加者の衆知を結集して可能な限り精密・精覈に讀む」ことと「漢文訓讀の學習」を目標とし、その対象として柳宗元が讀まれた。

このような成り立ちを踏まえると、本書を純粹な柳宗元研究書とのみ評することにはためらいを覺える。柳宗元という魅力ある困難な対象に向って、その讀解に挑んだ苦闘の記録でもあると言ってもよい。私たちはむしろ讀解の結果ではなく、その過程を讀み取るべきかもしれない。ていねいにすべてにルビを施した訓讀や、饒舌ともいえる「注解」の説明が、本書の持つそうした性格の一端を示唆しているように思う。

インターネットの普及やスマートフォンをはじめとする携帯端末の登場によって知的生活の様相が激變し、一般の人々にとって舊來の意味での讀書が日常的な行爲ではなくなりつつある今、古典の讀解力や漢文訓讀の傳統を保持することは、次第に困難になってきている。そして同様の状況は學生や専門の中國古典研究者にも及んできているように思える。このような中、柳宗元の「古文」という中國古

典中の精髓を対象として、これを地道に漢文訓讀法によって讀み解き、傳えようとした本書の試みは貴重な意義をもつといえよう。

（新典社注釋叢書、二〇一四年三月、本文四八八頁、

索引二〇頁）